日本中国語学会々報　2020年6月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶 1
荒川清秀先生への名誉会員称号授与にあたって 2
支部例会報告　2020.1-2020.5 3
会議報告 5
全国大会および例会に関するお知らせ 9
事務局からのお願いとお知らせ 11

ご挨拶

小野秀樹（日本中国語学会会長）

春先以来、たいへんな状況が続いておりますが、お元気でお過ごしでしょうか？

会員各位におかれましては、新型コロナウイルス感染症の影響で、生活や仕事、研究活動などの諸方面において、日々さまざまなご苦労やご不便がおありかと存じます。

未曾有の事態のなかで学会の事務局を引き継ぎました。人と人とが直接会うことが困難な状況の下、新しい事務局の体制を整えるのにもおよそ 2 ヶ月の時間を要しました。一方で、4 月になった途端に、今年度の学会運営と行事の開催などについて、ひとつずつあらためて考え直していく必要が生じました。とにかく前例が一切ありませんので、すべて手探りでの検討になりましたが、理事会ならびに各委員会委員長、事務局との間で協議を進めてまいりました。まず、各支部例会での活動を7月末まですべて自粛していただくことを4月初旬に理事会で決定し、世話人の皆さまに文書でお願いをいたしました。その後 5 月 17 日にウェブ会議で開催しました理事会において、今年度の行事開催を中心に学会としての活動の方針をいくつか決めました。学会が主催する大きな行事は、9 月の中国語学セミナーと 11 月の全国大会ですが、それぞれについて、現時点では一応予定通りに開催することを前提として準備を進めることといたしました。ただ、実際に開催できるかどうかが甚だ不確定であることから、開催不可の場合に備え、関係各位に極力ご迷惑がかからず、エネルギーの浪費を最小限に抑えられるように、準備の手順やスケジュールについて細かく検討いたしました。その結果、今年は例年に比べてかなり大きく変更している部分も少なくありません。詳しくは本会報ならびに学会ウェブサイトに情報を記載しておりますのでご確認ください。これまでの協議において、特に吉川雅之委員長と大会運営委員の皆さまには多大なご尽力をいただきました。また一方で、竹越孝委員長と編集委員の皆さまには、対面式での会議が開けない状況が続くなか、オンライン会議とメール通信の併用により、ここまで例年通りのスケジュールで『中国語学』267 号の編集作業を滞りなく進めていただき

ました。それぞれ例年にはなかった臨時の対応をしていただき、ご不便な状況下でいつにも増してご協力を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

さて、準備の方針は一応整いましたが、今月以降はそれを順々に遂行していくことになります。よほど事態が変わらなければ、すでにお知らせしておりますように、セミナーと全国大会については、いずれも当日の 5〜6 週間前を目処に開催するかどうかをあらためてお知らせする予定です（開催すると決定しても、その後当日までに事態が急変した場合は、さらに決定を変更することもあり得ます)。このことについては、所轄の WG および委員会のご意見も伺いながら、理事会で慎重に協議して決定いたしますが、何よりも人命尊重と感染拡大の防止を最も優先すべき基準として判断したいと思っております。会員が一堂に会して学術的な知見を得、交流を深める場が減ったり無くなったりすることは、皆さまにとりましても大きな損失であり、その点については重々承知しているつもりです。ただ、逆に無理をして人命に関わる事態が発生したり、感染拡大を助長したりするようなことがあってはならないとも考えます。このような非常事態が秋まで継続した場合、危険を冒してまで大勢の人が集まる会を強行するのは慎むべきことだと愚考いたします。学術団体としての社会的な配慮も念頭に置くべきかと思います。健康な心身あってこそ全力で研究に打ち込むことが可能です。会員の皆さまにおかれましては、感染症の状況に応じてご自身の研究計画をお考えいただくとともに、状況によっては、今年度の行事開催に関する決定についてもご支持とご理解を賜りますようお願いいたします。特に今年度の大会での発表を検討中の方は、感染症への対処の結果として、大会が開けない可能性があることをあらかじめ十分にご諒解いただいた上で応募してください。

今年度は異例なことが多く、今後も引き続き、委員の方々や会員の皆さま方に臨時のお願いをしたりご不便をおかけしたりすることもあろうかと存じます。我々事務局としましては、この難局を乗り切るべく奮励努力して会務を執行してまいる所存ですので、どうか事情をご高察の上、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

皆さま方のご健康とご無事を心よりお祈り申し上げます。　［2020 年 6 月 19 日記］

荒川清秀先生への名誉会員称号授与にあたって　塩山正純（愛知大学）

愛知大学名誉教授荒川清秀先生は 1949 年 8 月の生まれで､本学会には 1972 年に入会され、会員歴は 48 年を数えます。この間、全国大会で入会年の「同義語の分析」を皮切りに､「形容詞の命令文」「了のいるとき、いらぬとき」「“买回来”と“寄回来”」など多数の報告があり、2007 年度大会では招待講演もされました。東海支部の活動でも中心メンバーとして地区の中国語学研究を牽引して来られました。『中国語学』への掲載論文も多く、一連の文法研究は『動詞を中心とした中国語文法論文集』（白帝社 2015）として刊行されています。

日中同形の漢語の研究でも『近代日中学術用語の形成と伝播』（白帝社 1997）『日中漢語

の生成と交流･受容』(同 2018)の著書があり、特に前者は日本語学会、地理学会など多分野の学会からも学際的研究として高く評価されています。2005 年以来、東方書店の『東方』に「やっぱり辞書が好き」を連載中で、その成果は『中国語を歩く』シリーズとして刊行されており、中国語レアリア研究、言語景観・路上観察学の先駆とも言えます。

教育面でも『用例用法初級中国語』(光生館 1985）以来、入門、中級、講読テキストを十数種編集され、NHK ラジオ、テレビの講師も複数年度つとめられました。2006 年以来、愛知大学孔子学院長としても、社会人・一般学習者を対象に、講演会･講座の活動を通して、中国語学習・研究への理解が深まるように貢献して来られました。

本学会の運営面でも、長年にわたり理事・評議員をつとめられたほか、副会長（１期)、『中国語学』編集委員長もつとめられました。荒川先生の学術・教育面での社会貢献、本学会運営に対する貢献は顕著であり、2019 年度大会で名誉会員称号の授与が承認されました。

―略歴―

1949 年 8 月　兵庫県生まれ。言語形成は大阪北摂地区。

1977 年 3 月　大阪市立大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程を修了。同年愛知大学教養部に赴任。

以来、国際コミュニケーション学部言語コミュニケーション学科を経て現在地域政策部教授、図書館長（2 期)。博士（文学　大阪市立大学)。

2020 年 3 月　愛知大学を定年退職。現在名誉教授。

―学会関係・役職歴―

1972 年入会。

1996 年　日本中国語学会理事（現・評議員）（～2004 年、2012 年～2016 年）

2000 年　日本中国語学会編集委員（～2004 年、2002 年～2004 年編集委員長）

2002 年　日本中国語学会常任理事（現・理事）（～2012 年、2006 年～2008 年副会長）

2019 年　日本中国語学会名誉会員の資格が承認される（2020 年度より名誉会員）

支部例会報告　2020.1-2020.5

◆関東支部例会

◇2020 年 3 月 21 日（土）大東文化会館 302 教室

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

◆北陸支部例会

◇2020 年 3 月 14 日（土）富山大学五福キャンパス共通教育棟 A 棟 1 階 A11 ラーニング・コモンズ

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

・董微雨（新潟大学・院）　「評価」を表す方向補語“上去”と“起来”について

中国語では、方向動詞“起来”と“上去”の意味が拡張し、動詞の後ろに付き、“V 起来/上去+AP/NP“という形で発話者が事物に対して評価や見積もりを行うことが表せる。今まで、“V 起来”と“V 上去”の使い分けについて多くの先行研究がある。しかし、挙げられた例はコーパス調査の結果と不一致であったり、筆者が例文の容認度に対して疑問を感じたりする場合もある。また、“V 起来/上去+AP/NP“において、英語では、本来なら目的語となるはずの語句を主語とする中間構文と見なすべきか、話題を述べているトピックセンテンスと見なすべきかと意見が分かれている。本発表では、具体的な言語資料を観察した上で、インフォーマント調査を加え、“V 起来/上去+AP/NP”、“V 起来”、“V 上去”の相違点について再検討したい。

・孫琰（新潟大学・院）　中国語の前置詞“给”に関する研究　—“为”との使い分けを中心に—

介詞“给”の使い方は様々である。近年介詞“给”についての研究がだんだん増えている。その中に“给”と“为”の使い分けを中心にした論文が多い。しかし、これまでの研究は“给”と“为”述語の種類との関係について行われてきた。“给”と“为”と両者の導く対象との関係については、先行研究ではほとんど論じていない。本稿では用例分析を通し、“给”と“为”の導く対象と述語の表す動作の関係を分析し、両者の導く対象の違いを明らかにして両者の使い分けを検討する。

・王瀟玄（新潟大学・院）　汉语意愿助动词“想”和“要 1”的对比

刘月华《实用现代汉语语法》（1983）给助动词“要”概括出三个义项：1 表示有做某事的意愿。2 表示事实上或情理上需要。3 表示“可能”、“会”的意思，但语气比“可能”、“会”更肯定。本文拟对意愿助动词“想”和“要 1”进行对比。“想”和“要 1”都能用来表达“自发的主动的意愿”。但在语法上两者的修饰语不同，在语义上“想”更强调内心的打算，“要 1”往往后续有必然的行动，在语用上“想”的语气更缓和，“要 1”更强调实际行动的决心。本文拟从以上三个方面对比说明“想”和“要 1”的区别。

・福田翔（富山大学）　〈V 到〉の意味とコンテクスト

我买到了一本书 と 我买了一本书 が表す意味は、客観的な事実としては同じであるが、前者の文は後者に比べると、何らかの文脈的な含意があるように感じられる。本研究では、V が獲得義を表す〈V 到-対象〉の意味について、〈V 到-時間/場所/程度〉（走到邮局、谈到半夜、红到发烫）や〈V 了〉（买了、捡了）等、構造や意味の類似性が見られる諸形式と比較・対照することで、典型的には「持続・状態」ではなく「到達・達成」に焦点が当たり、それがコンテクスト的意味に反映されることを、構造と意味のミスマッチ、心的走査等の観点から考察する。本研究は〈V 到〉が表す意味について、コンテクストの観点を含めて分析を行ったものである。

会議報告

■ 編集委員会

◆第 1 回編集委員会（『中国語学』267 号）

日時：2020 年 3 月 17 日～20 日（メール審議）

出席者：竹越孝（委員長）、遠藤雅裕、丸尾誠、雷桂林、森宏子、千葉謙悟、中西裕樹、張佩茹（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 267 号の投稿論文について

・投稿総数 22 篇。審査の結果、22 篇すべてを受理した。分野別内訳は、現代語文法 15、歴史文法 4、方言音韻 1、音韻史 1、中国語教育 1 である。各篇について査読者各 3 名を決定した。査読報告書の提出期限を 5 月 7 日（木）とし、5 月 16 日（土）の第 2 回編集委員会において採否の決定を行うこととした。

2. 『中国語学』第 267 号の特集論文について

・昨年度の大会講演をご担当いただいた潘海華氏（香港中文大学）および林若望氏（台湾中央研究院語言学研究所）に寄稿を依頼することとした。

3. 2020 年度学会奨励賞の候補者について

・『中国語学』第 266 号に掲載された論文の執筆者の中から 2 名を選出し、5 月の第 2 回編集委員会において候補者を決定することとした。

◆第 2 回編集委員会（『中国語学』267 号）

日時：2020 年 5 月 16 日（土）13 時～16 時（オンライン審議）

出席者：竹越孝（委員長）、遠藤雅裕、丸尾誠、雷桂林、森宏子、千葉謙悟、中西裕樹、張佩茹（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 267 号投稿論文の採否について

・受理した 22 篇の投稿論文を査読結果に基づいて審議した結果、5 篇を要二次審査、17 篇を不採用とした。要二次審査の 5 篇については、6 月 30 日（火）必着で修正論文の提出を求め、編集委員会において二次審査を行った上で、掲載の可否を最終決定することとした。

2. 2020 年度学会奨励賞の候補者について

・第 1 回編集委員会で選出した 2 名の執筆者について審議を行い、学会奨励賞の候補者を理事会に報告することとした。

3. その他

・今年度交替する委員 4 名の後任につき、人選や今後のスケジュール等に関する意見交換を行った。

■ 大会運営委員会

通信による持ち回り審議（2019 年 4 月 4 日～5 月 10 日）

委員：吉川雅之（委員長）、荒木典子、王周明、奥村佳代子、加藤晴子、塩山正純、島村典子、濱田武志、前田真砂美、李佳樑、盧建

【報告事項】

1. 第 70 回大会の準備状況について

（1）新型コロナウィルスによる感染症の流行拡大が懸念されるため、大会開催の可否及びスケジュールの変更について、様々な角度から検討を行った。検討の結果は理事会に上げ、審議を行っていただくことにした。

（2）研究発表およびワークショップの公募

に先立ち、ウェブサイトに掲載する各種応募書類の修正・確認を行った。

2. 第 69 回大会の会場で見られた問題について

・問題点を精査し、講じる対応策を検討・確認した。

3. 第 71 回大会について

・開催校について現在交渉中である。

4. その他

・将来的に、研究発表の応募を電子メールではなくウェブサイト上で行えるよう、検討を開始した。

■ 学界展望編集委員会

メールによる持ち回り審議（2020 年 4 月 17 日～4 月 19 日）

委員：秋谷裕幸（委員長）、石崎博志、加納希美、鈴木慶夏、戸内俊介、野原将揮、橋本貴子、濱田武志

・2019 年度学界展望・語学分野の執筆について持ち回りで審議を行い、今年度は以下の方針で執筆することとなった。その結果については、日本中国学会出版委員会・静永委員長にも報告した。

・「例年通り、2019 年度学界展望を執筆する。その際、諸般の事情から関連資料収集に遺漏が存在しうることを明記する。言及できなかった業績については 2020 年版で追補する。なお、追補の必要が生じた場合には、2020 年版での文字数増を要請する可能性がある。」

・なお本審議は、第 1 回理事会（2020 年 5 月 17 日）において本委員会の新設が承認されることを前提として行われた。

■ 2020 年度第 1 回理事会

日時：2020 年 5 月 17 日（日）14 時～17 時
（ZOOM によるオンライン会議）

出席者：小野秀樹（会長）；楊凱栄（副会長）；秋谷裕幸、伊藤さとみ、遠藤雅裕、古川裕、丸尾誠、吉川雅之（以上理事）；竹越孝（編集委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；吉川雅之（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；池田晋、今井俊彦、松江崇（以上幹事）

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 役員・委員等の異動

・ 評議員交代（敬称略）

関東支部：王亜新（東洋大学）
→雷桂林（桜美林大学）
大島吉郎（大東文化大学）
→安本真弓（跡見学園女子大学）
山田忠司（文教大学）
→西香織（明治学院大学）
伊藤さとみ（お茶の水女子大学）
→保坂律子（駒沢女子大学）
吉川雅之（東京大学）
→野原将揮（成蹊大学）
[補充]氷野善寛（目白大学）

北陸支部：山田眞一（富山大学）
→加納希美（金沢大学）

東海支部：黄名時（名古屋学院大学）
→張勤（中京大学）
[退任]丸尾誠（名古屋大学）

関西支部：于康（関西学院大学）
→任鷹（神戸市外国語大学）

・ 会計監査：小方伴子（二松學舍大学）
→飯田真紀（東京都立大学）
加藤宏紀（神奈川大学）

→石村広（中央大学）

1.2 会員動向（2020 年 4 月 1 日現在）

・ 会員数：

			増減
総会員数（賛助除く）		1040 名	－89
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	15 名	－2
	通常会員	944 名	－76
	団体会員	5 名	±0
	海外会員	71 名	－11
賛助会員		20 社	±0

※増減は昨年 10 月 1 日を基準とした数。

2019 年度の除籍者は 67 名（国内会員 55 名／海外会員 12 名）。

1.3 事務局の所在地について

［本部所在地］

〒153-8902　東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部中国語部会内

［事務支局］

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

中西印刷株式会社　学会部内

担当：大西　佑佳

Tel：075-415-3661　Fax：075-415-3662

E-mail：chilin@nacos.com

2. 支部例会関連

・ 支部例会世話人交代（敬称略）

関東支部：荒木典子（東京都立大学）

→石村広（中央大）

北陸支部：山田眞一（富山大学）

→加納希美（金沢大学）

東海支部：丸尾誠（名古屋大学）

→張勤（中京大学）

・ 今年度の例会について

※新型コロナウイルスの感染拡大を受け、4 月 6 日付で事務局より各支部世話人へ、7 月末までの例会活動の自粛を要請した。8 月以降の例会開催については現時点では未定。

＜各支部世話人と開催予定回数＞

北海道（山田　敦士会員）：　-回

関　東（石村　　広会員）：　-回

北　陸（加納　希美会員）：　-回

東　海（張　　勤会員）：　-回

関　西（大岩本幸次会員）：　-回

中　国（荒見　泰史会員）：　-回

九　州（木村　裕章会員）：　-回

3. 大会運営委員会報告

2020 年度第 1 回理事会

【報告事項】

大会運営委員会報告

吉川委員長より次の報告があった。

（1）委員の交代について

・退任：秋谷裕幸（2020 年 3 月 31 日付）

・就任：島村典子（2020 年 4 月 1 日付）

※理事会枠委員は加藤晴子会員から吉川雅之会員に交代。

（2）第 70 回大会の準備状況について

1）日程・開催校・代表

［日程］2019 年 11 月 7・8 日（土・日）

［学校名］愛知大学名古屋キャンパス（名古屋市中村区）

［代表者］塩山正純会員

2）基調講演

講演者を検討中である。

3）託児所

設置を予定しており、開催校と準備を進めている。

4. 編集委員会報告

竹越委員長より、次の報告があった。

(1)『中国語学』267 号査読結果

受理した投稿論文 22 篇（不受理 0 篇）について査読報告書に基づき採否の判定を行い、5 篇を要二次審査、17 篇を不採用とした。

(2)『中国語学』267 号特集について
潘海華氏（香港中文大学）および林若望氏（台湾中央研究院語言学研究所）に寄稿を依頼することとした。
(3) 学会奨励賞候補者推薦について
第 2 回委員会において、候補者を選考した。

5. 辞典編纂委員会報告
平田委員長より今後の方針についての説明があった。

6.学界展望編集委員会報告
秋谷委員長より、2019 年度版の執筆方針について報告があった。

7. 除籍者と再入会の扱いについて
松江幹事より今年度の状況について報告があった。

【審議事項】

1. 第 70 回大会について
・吉川委員長より、新型コロナウィルスによる感染症の流行拡大が懸念されるため、大会開催の可否及びスケジュールの変更について大会運営委員会で様々な角度から検討を行ったことが報告された。そして、検討した結果に基づき、予定どおりの 11 月 7・8 日の開催を前提として、スケジュール及び記念大会的性格について調整を行いたいとの提案がなされた。
・慎重審議の結果、以下のとおりとすることにした。
(1) 大会の開催・中止を決定する期限
・大会を開催するかそれとも中止するかは最終的に 9 月下旬に決定する。開催日の変更は行わない。
研究発表の募集に際しては、事前に「開催・中止の決定は 9 月下旬に行う」こと、そして開催と決めた場合でも「急遽中止とすることが有り得る」ことを学会ウェブサイトに明記する。
・急遽情報発信を行う場合は、(a) 学会ウェブサイト、(b) メールマガジン、(c) 大会運営委員会から発表者へ送信する電子メール、等各種媒体を用いて発信を行い、周知を徹底する。
(2) 研究発表に関するスケジュール
(i) ワークショップの応募期間は 6 月 17 日から 7 月 17 日までとする。
(ii) 分科会・ポスター発表の応募期間は 7 月 16 日から 7 月 30 日までとする。
・分科会発表については「講評無し」のみの募集とする。
・採択者一覧は遅くとも 8 月 29 日に学会ウェブサイトに掲示する。
(iii) 予稿集原稿の提出期間は 10 月 10 日から 10 月 24 日までとする。
・予稿集は電子版のみの発行とする。
(3) 第 70 回大会の記念大会的性格について
・濃密接触を避けるという観点から、今年の大会には記念大会的性格は盛り込まず、大会を開催したとしても懇親会は行わないこととする。また、記念大会的性格を 2021 年度の大会に譲って付与するか否かについては別途検討する。

・全国大会での研究発表申込に関して
吉川委員長より、将来的に、研究発表の応募を電子メールではなくウェブサイト上で行えるようにしたいとの提案があった。省力化の観点からも望ましいことであるので、大会運営委員会で具体的検討に着手してもらうことにした。

2. 学会奨励賞の授賞者について
学会奨励賞の授賞者について、編集委員会の原案通り承認した。

3. 次期全国大会開催校について

次期開催校の選考状況、および第70回大会の記念大会的性格の持ち越しについて意見交換をおこなった。

4. 学界展望編集委員会の設置について

学界展望編集委員会の今年度からの設置が理事会で承認され、同時に同委員会の内規を以下のように定める提案も承認された。

「学界展望編集委員会内規」

(1) 所掌事項

『日本中國學會報』（日本中國學會）に掲載され『中国語学』（日本中国語学会）に転載される，「學界展望　語學」の作成及び関連する諸業務

(2) 委員

ア 委員数は 8 名とする。但し，うち 1 名は選出時に理事の職にある者をもって充てる。

イ 委員の任期は原則として，全国大会終了以後翌々年度大会終了までの 2 年とし，再任を妨げない。委員長の任期は 2 年とする。ただし，業務遂行上の必要があるときは，1 年任期の委員を置くことができる。

ウ 委員の改選は，本委員会が発議し，理事会の承認を経て，会長が委嘱する。

5. 中国語学セミナーについて

・第二回「中国語学セミナー」は、9月12日（土）京都大学吉田キャンパス（吉田南構内）にて開催予定である。今回は、太田斎会員（神戸市外国語大学名誉教授）、杉村博文会員（大阪大学名誉教授）、平田昌司会員の三氏に講師をつとめていただくことになっている。

・中国語学セミナー・ワーキンググループの設置が承認された。このWGで第二回の実務および第三回の企画・準備を担当することとなった。

・新型コロナウイルスの影響により開催が困難であると判断された場合は、今年度の中国語学セミナーは中止とする。実施の可否は、開催日の 5〜6 週間前に WG および理事会での協議を経て決定し、学会ウェブサイト等で告知する。

6. 四国支部について

今年度に限り、秋谷裕幸会員が理事と四国支部評議員を兼任することとなった。

7. 顧問・名誉会員の推挙について

ニューズレターに名誉会員の推挙依頼を掲載することとした。

8. 意見交換

『中国語学』査読者の公開の必要性の有無、公開する場合の据置期間等について意見が交わされた。秋の理事会で審議事項として検討することとなった。

全国大会および例会に関するお知らせ

第 70 回全国大会について

新型コロナウイルスによる感染症の拡大を受けて、日本中国語学会では 2020 年 11 月 7 日（土）〜11 月 8 日（日）に愛知大学名古屋キャンパス（愛知県名古屋市）で予定している第 70 回全国大会について、理事会ならびに大会運営委員会で目下慎重に検討を進めております。現時点では予定通りに開催するという前提で、各種発表の募集を行なうことにいたしました。

大会を開催するかそれとも中止するかは最終的に 9 月下旬に決定し、あらためて告知しますが、開催を決めた場合でも、その後の状況変化によっては急遽中止とせざるをえない可能性が有ることを、あらかじめご承知おきくださいますようお願い申し上げます。

第 70 回全国大会についての最新情報は、本学会ウェブサイトならびにメールマガジンに掲載いたします。また、各種研究発表に関するスケジュールも今回は下記のとおり例年と大きく異なっておりますので、ご注意ください。

・ワークショップの応募期間：2020 年 6 月 17 日から 7 月 17 日まで

・分科会・ポスター発表の応募期間：2020 年 7 月 16 日から 7 月 30 日まで

（事務局）

今年度の例会について

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、現在各支部に 7 月末までの活動自粛をお願いしております。そのため、7 月末までの例会実施予定はありません。

8 月以降の開催については、今後の状況を見ながらあらためて実施の可否などについて検討していく予定です。詳細が決まり次第、各支部世話人の方に通知するとともに、学会ウェブサイト等にてお知らせいたします。（事務局）

第二回「中国語学セミナー」のご案内

2020 年 9 月 12 日（土）13:00-18:00、京都大学吉田キャンパス（吉田南構内）において第二回「中国語学セミナー」が開催されます。講師は太田斎会員（神戸市外国語大学名誉教授）、杉村博文会員（大阪大学名誉教授）、平田昌司会員を予定しています。

聴講は事前登録制となっております。会場の都合上、先着 60 名様とさせていただきます（今年度は会場の過密化を避ける目的で聴講者数の上限を昨年より減らしました。ご理解を賜りますようお願い申し上げます）。詳細は本学会ウェブサイトをご覧ください。参加費（会員￥1,500／非会員￥3,000）は、当日会場にて現金でお支払いいただきます。

なお、今年度は新型コロナウイルス感染症の状況に基づいて、開催できるかどうかを8月初旬に検討・確認し、あらためて告知いたします。事前に聴講のお申し込みをしていただいても、止むを得ず中止とする場合もありますので、あらかじめご了承ください。

【講師（五十音順）と講義題目・要旨】

・ 太田斎（神戸市外国語大学名誉教授）：
常用語彙に見られる変な発音

普通話では規範化された漢語として、意味の違いを伴わない一字多音は整理されて、そのうちの代表的な形式が選ばれて一字一音になっているが、徹底しないところもある。例えば「杉」の shān、shā は文白異読として処理されるが、「秘」の mì、bì はどうか？「一」、「不」だけ何故特殊な変調パターンを採るのか？規範化されていない現代方言の常用語

彙にはこのような例外的な発音が多く見られる。普通話に近い現代北方方言のデータを基に、このような発音が生まれる原因、発音の歴史的変化の参考資料として有効性について解釈してみたい。

・ 杉村博文（大阪大学名誉教授）：現代中国語の「文」の構成の基本設計

現代中国語シンタクスの基本設計の一つに朱德熙(1992)のモデルがある。このモデルは「形態素は基本的に単音節である」を基点に置き、朱氏の中国語文法理論の根幹である「一品詞多機能」や「文の構造原則と句の構造原則が一致する」を経過して「修飾語が長すぎたり、複雑すぎたりすることはよくない」という語用論的制約にまで説き及ぶ。その一方で、朱氏は構文を語ることが少なく、中国語は主述の間の統語論的・意味論的構成が相対的に緩いという認識の根拠として所謂「主述述語文」に言及する以外、構文には基本的に関心を示さない。本講義では朱德熙(1992)をベースに、現代中国語の「文」の構成の基本設計について考えてみたい。

・ 平田昌司：趙元任を読みなおす

今ではなまえだけが知られ、実際にはほとんど読まれていない趙元任(1892-1982)の仕事は、中国語学研究にとって忘れてはならない基点である。かれの業績を読む際は、胡適(1891-1962)に代表される五四運動型の言語・文学観という時代背景があることに注意を払わねばならない。本講義では、「初級」中国語教科書として歴史上最高水準のできばえである *Mandarin Primer*［國語入門］(1948)を中心に、趙元任の中国語口語記述の概要を紹介し、あわせて現在の中国語研究にとって趙元任が持つ意義を論じる。

（事務局）

事務局からのお願いとお知らせ

■ 名誉会員の推挙について

名誉会員の推挙は、9 月 30 日までに推薦文を添えて事務局宛にお願いします。なお、名誉会員称号授与の条件は、年齢満 70 歳以上で継続して 20 年以上本会会員であった方のうち、本会の発展に功労のあった方となっており、理事会と評議会での審議を経た上で会員総会において決定されます。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、事務局までご連絡をお願いします。

荒屋勸、乾俊文、重光雨青、中野尚美、長谷川龍太郎、林君穂、山下輝彦、楊明、楊立明、沈德思、張群、蕭景浚、氷野歩、湯翠蘭、陳陸琴、陳述、賈智、石亮亮、陳家隽、胡貴躍、宋蔚、呂衛清、越山拓馬、楊洲、馬勝超、呉芝蒸、宮雪、李藝、銭金玲、潘瀟、令狐菁菁、劉妍、恵詩文、張茜、孫德坤、孫婧、王巍（敬称略）

■ 2020 年度会費納入のお願い

先にお送りした請求のご案内の通り、本年度会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

『中国語学』バックナンバーなどに記載されている旧口座には振り込まないようお願いします。なお、これまでの会費が未納の方は請求のご案内に記載していますので、一括してご入金下さい。もし記載請求金額が15,000円以上となっておりましたら、今年度ご入金いただけませんと、会則《会費納入に関る内規》により除籍となりますのでご注意下さい。なお除籍者名は冬のニューズレター上で公表されます。

■ 会員情報更新のお願い

今年度は、会員名簿作成の年にあたります。この機会に、ぜひ会員データ管理システム e-naf にアクセスして、御自身の会員情報の、特に御所属と身分につきまして、確認と更新をお願いいたします。職名の具体的な凡例については、 e-naf の会員登録情報のページを御覧ください。なおこの凡例は事務処理を目的としたものですので、今後も実情に応じて改訂することがあります。

修正期限：2020 年 8 月 31 日（月）

■ 退会について

退会は、届出のあった年度末を以て退会となるように手続きをすすめます。届出時から過去に溯って退会扱いとすることはできません。加えて退会は、届出た年度を含め、会費の未納がないことが前提となっています。無用の混乱を避けるため、退会をご希望の方は、必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは「過去の予稿集について」をご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先 2022 年 3 月まで

事務局への郵便物は、
〒153-8902　東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学教養学部中国語部会内
日本中国語学会事務局
あてにお願いします。また各種のお問い合わせは、学会ウェブサイト内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

2020 年 6 月

訃 報

本学会名誉会員である讃井唯允先生（東京都立大学名誉教授）におかれましては、2020 年 3 月 18 日に満 79 歳の生涯を閉じられました。ここに謹んでお知らせいたします。先生の多大な功績を讃えるとともに、永年にわたって本学会ならびに中国語研究と教育の発展に寄与されたご尽力に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2020 年 6 月
日本中国語学会会長 小野 秀樹

日本中国語学会々報 2020 年春季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒153-8902　東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部中国語部会内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2020 年 6 月 27 日